気配のある場所ー活き活きとした集落へ

黒島地区の復興まちづくりアイデア部門

気配を回復する

黒島の集落を歩いて感じるのは、静かさである。
地震による被害や高齢化により、人が減り、この場所で人が暮らしている気配が弱まりつつある。それが、静かさとなり、その静かさが、また、人を流出させ、外からの人の流入を遠ざけて行く。
昔、人がたくさん住んでいた頃には、子供の声、夕餉の匂い、窓の灯り、そういう小さな気配による落ち着いた活気で、集落は満たされ、人々は安らかに暮らしていた。
集落が昔持っていただろう「失われた気配を取り戻すこと」、そうやって、「人の気配に満ちた場所」をつくることで、住民を元気づけ、来訪者には活き活きと見える集落にし、活性化を行おうというのが、この提案である。
大都市を除き、「人の気配に満ちた場所」は、今、日本から消えつつある。
そういう「人の気配に満ちた場所」は懐かしさであり、美しい集落と人の気配が結びついたとき、観光客を引きつける魅力となって行く。

「大きな仕掛け」ではなく、「小さな気配」をたくさんつくる

気配とは、小さく繊細であるからこそ、気配である。それは、視覚、聴覚、味覚、嗅覚、触覚の五感を通して感じるものである。
「大きな仕掛け」を一つつくるようなまちづくりは、その回りだけが強調され、集落全体に対する波及効果が弱い。この提案では、一見すると、意図的に集められたようには見えない、「小さな気配」を、集落全体にわたって、たくさん配置して行く。
気配をつくる力が衰えているので、住民が、自分たちでつくり出すことのできる気配に、さらに、人工的につくられた気配をブレンドする。それらを、時間や季節によって変化させ、背後にいる、変化をコントロールする住民の存在を暗示する。
「大きな仕掛け」とは違い、景観の一要素として、目立たないように配されるので、伝統的家屋の残る集落景観を大きく変えず、意図的なものだとは気付かない。集落を歩くと、さまざまな「小さな気配」が、知らず知らずに、目、耳、鼻などを通して、人の中に、無意識に入り込んで来る。
「小さな気配」は、変更や交換、移動の容易な仕掛けである。時間を掛け、少しずつ、つくって行くことも可能であり、フレキシビリティーが高い。その点で、一度つくってしまえば変えることの難しい「大きな仕掛け」とは対照的である。

「住民による気配」と「人工的につくり出す気配」

小さな気配には、いくつかのタイプがある。

「住民による気配－１」ー「湯気」「調理の匂い」
元々、この集落に存在しているが、それが、表に現れていないため、効果をつくり出していない気配。それを、人の目に触れやすいところに移動する。

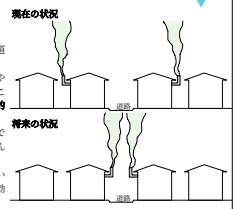
「住民による気配－２」ー「鉢植え」「小動物」「干し物」「すだれ」「のれん」
一部の住民によって維持されているが、数は少なく、効果を上げていない気配。その数を増やして行く。
動物や植物のような「気配」の世話は、個人の住民に委ねるのではなく、住民グループが、集落全体の気配を一括して管理する。それが、住民同志のコミュニケーションや、集落維持への住民参加の意識を高めることにもなる。

「住民による気配－３」ー「さつまいも」「間垣」
以前は存在したが、今は、ほとんど消えている気配。それらを復活させる。いくつかは、能登という場に結びついた仕掛けであり、場所性を強調することにもなる。

「住民による気配－４」ー「里帰り宿」「露台」「全住民表示」
新たにつくるが、住民によって維持される気配。

「人工的につくり出す気配」ー「行灯」「窓の灯り」「人の声」
以前は、ふつうに存在していたが、今は、人工的につくり出さない限り、維持できない気配。
懐かしく感じられる気配を、コンピューター制御によって実現する。技術が進み、コンパクトで、かつ、ローコストで、簡単にできるようになった先端技術が、昔からの伝統的集落の再生の大きな力となる。

煙匂



「湯気」「調理の匂い」
多くの家で、台所や浴室の換気を、道路とは反対側の家の裏に出している。換気口や煙突から立ち上る「湯気」や夕餉の「調理の匂い」は、人が、そこに住んでいることを示す大事な**視覚的気配**である。
ダクトを引き伸ばすことが可能な家では、表側に換気口や煙突を回し、住んでいる気配を効果的に見せる。
特に、気温差のある冬は、湯気が、いっそうはっきりと立ち上り、大きな効果を上げる。

鉢猫鳥

自生している植物とは違い、「鉢植えの植物」は、人が手を掛けて育てており、背後に、人の存在を暗示する**視覚的気配**である。季節を伝える時間の仕掛けでもある。
「猫」も「鳥かごの小鳥」も、同様に、**視覚的気配**であると同時に、音をつくる**聴覚的気配**である。さらに、細かい動きを伴うので、街並に、動的な変化が導入される。
個人で世話をすると、集落全体には広がって行かないため、ここでは、住民の共同世話グループを設け、彼らが、集落の効果的な道陸に、「鉢植え」や「鳥籠」を置き、「猫」の拠点をつくり、一体的に世話をする。「猫」は、避妊をした上で、放し飼い。「鳥籠」は夜、取り込む。
共同の世話が、住民のコミュニケーションを促進する。

干

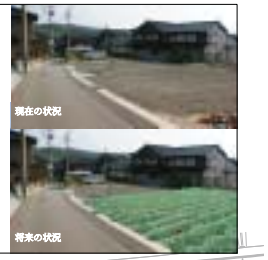
「干し物」
他の地域に比べて、能登では、軒先に野菜などを干す風景を頻繁に見掛ける。
「干し物」もまた、人が収穫し、そこに干したという、人の営みを暗示する**視覚的気配**である。
その「干し物」を徹底させ、一年を通して、いろいろなものが干されているようにする。そうすることで、それも、また、季節を伝える時間の仕掛けとなり、ここが、能登であることを伝える場所性の仕掛けとなる。
玉ねぎ、柿、昔は黒島の名産であったさつま芋、魚、わかめなどである。
各家に協力を要請して、積極的に風景をつくり、一部は、名産品として、販売することも考える。

簾

「暖簾」「すだれ」
時々、格子造りの家をはさみながら、下見板張りの家並みが、これだけ続くのは、壮観だが、下見板張りの家の違いは少なく、少し単調な印象でもある。
郵便局、博物館、床屋、仕出屋などの店舗では、商業的な営みを知らせる、伝統的な仕掛けである「暖簾」を出す。
「すだれ」も、中にいる人のプライバシーを守り、居住する室内の温度を快適に調整する、という意味では、人の営みを暗示する**視覚的気配**である。
「暖簾」「すだれ」をうまく活用することで、気配がふくらむと同時に、窓の表情が、より多彩になる。そして、また、伝統的街並にそぐわないアルミサッシュの窓の印象を和らげる機能も併せ持つ。

芋

「さつま芋」
樹木や多年草は、人がいなくても育つが、野菜は、人の手が必要であり、野菜の栽培自体が、人の気配を暗示する。
今は、あまりつくられなくなったが、以前は、砂地の黒島で育つ「さつま芋」の味は有名だった。
集落内に点々とある空き地で、「さつま芋」を、住民の共同栽培グループが栽培し、共同で収穫し、それを干し芋に加工し、地域の産物として販売する。
干し芋は、天日による自然干しを売り物とし、家々の軒先を、住民の共同耕作グループが借り受けて、気配づくりを兼ねて、干し加工を行う。
「さつま芋」の栽培と干し加工が、季節を伝える時間の仕掛けとなる。



まちづくりにより変化した景観：午後４時

午後３時
住民が共同で世話をしている猫が、道に飛び出して来た。軒先に吊るした鳥籠では、じゅうしまっがさえずっている。
家の間からは、子供の声が少しだけ聞こえた。
夏の終わりだが、もう鉢植えでは、秋を知らせるように、サルビアやコスモスが咲き始めている。軒先にも、穫れたばかりの、玉ねぎが干されたようだ。
数軒先の家では、夕餉の支度を始めたようで、煙が立ち上り、いい匂いがして来る。
まだ、日没までは少し時間があるから、露台に腰掛けて、誰からが来るのを待っていようか。

現在の景観：午後４時

まちづくりにより変化した景観：午後７時

午後７時
９月になると、暮れ掛かるのも早い。
さっきまでは、空も明るく、少ししか窓の灯りも付いていなかったが、ぽつりぽつりと、玄関の灯りが付き、２階の窓の灯りが付き、気配が増えて来る。
窓から漏れる灯りや、玄関の照明のおかげで、道も明るく照らされている。
今日も、穏やかに一日が暮れて行く。

現在の景観：午後７時

垣

「間垣」
「間垣」は、能登独特の防風の仕掛けである。
昔は、黒島でも見られたが、今は、輪島西部の集落以外は、部分的である。
集落には、バス停留所、厨などが、伝統的な景観とは不調和な現代的な材料による工作物がいろいろと見られる。
それらを否定して、撤去するのではなく、能登独特の間垣で覆うことで、コスト的な負担などもあまり掛けずに、調和した景観へと変えて行く。
「間垣」は、恒久的な仕掛けでない故に、それを支える人たちの存在を暗示する視覚的気配である。そして、「間垣」を使うことで、黒島という集落が、能登という場所にあるということを、いっそう明確にする。

現在の状況

将来の状況

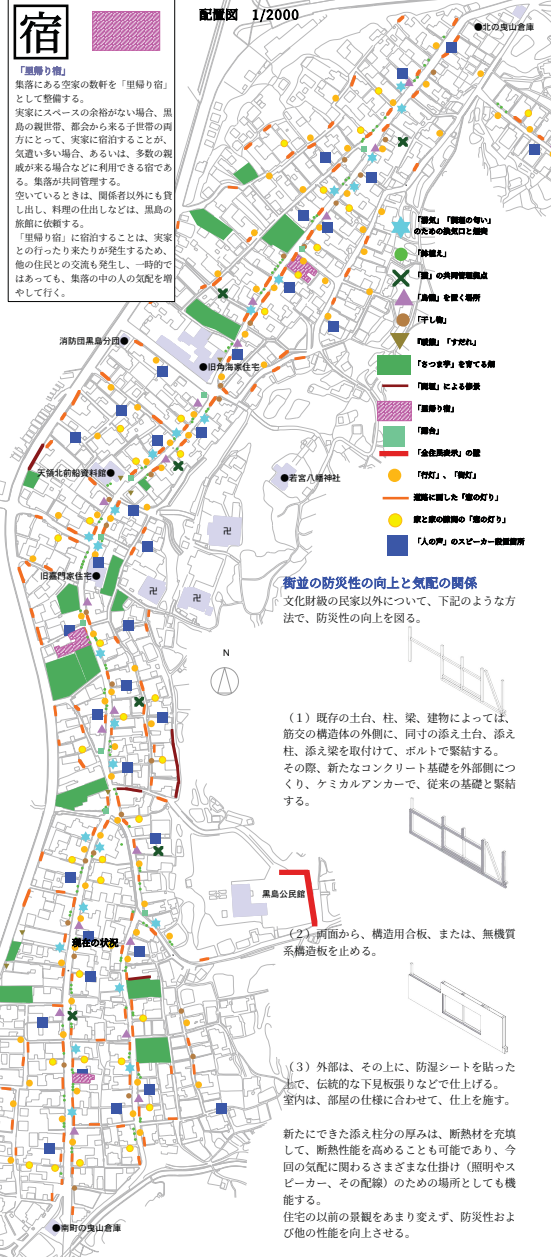
宿

「里帰り宿」
集落にある空家の数軒を「里帰り宿」として整備する。
実家にスペースの余裕がない場合、黒島の親世帯、都会から来る子世帯の両方にとって、実家に宿泊することが、気遣い多い場合、あるいは、多数の親戚が来る場合などに利用できる宿である。集落が共同管理する。
空いているときは、関係者以外にも貸し出し、料理の仕出しなどは、黒島の旅館に依頼する。
「里帰り宿」に宿泊することは、実家との行ったり来たりが発生するため、他の住民との交流も発生し、一時的ではあっても、集落の中の人の気配を増やして行く。

台

「露台」
集落の辻などに、「露台」を置く。
「露台」は、今、ここに住んでいる具体的な人の姿を集落の中で見せるための仕掛けである。

住民がいても、家の中に閉じこもり、住民同士の交流も室内で行われている限り、ただでさえ少ない人の気配が活かされない。
春から秋の陽気のいい日、井戸端会議のでできる場所として、露台をつくる。初めのうちは、積極的に奨励する必要があるかもしれない。
効果が上がった際には、もう少し規模を大きくし、屋根付きにしたり、四国にある茶堂のように、お茶やお水が飲めるようにしても、いいかもしれない。



街並の防災性の向上と気配の関係

文化財級の民家以外について、下記のような方法で、防災性の向上を図る。

（１）既存の土台、柱、梁、建物によっては、筋交の構造体の外側に、同寸の添え土台、添え柱、添え梁を取付けて、ボルトで緊結する。
その際、新たなコンクリート基礎を外部側につくり、ケミカルアンカーで、従来の基礎と緊結する。

（２）両面から、構造用合板、または、無機質系構造板を止める。

（３）外部は、その上に、防湿シートを貼った上で、伝統的な下見板張りなどで仕上げる。
室内は、部屋の仕様に合わせて、仕上を施す。

新たにできた添え柱分の厚みは、断熱材を充填して、断熱性能を高めることも可能であり、今回の気配に関わるさまざまな仕掛（照明やスピーカー、その配線）のための場所としても機能する。
住宅の以前の景観をあまり変えず、防災性および他の性能を向上させる。

灯窓

「行灯」「窓の灯り」
暗くなると、人の減った集落には、寂寥感が漂う。空家の窓は暗く沈み、暗い窓の多さで、町や人の気分も沈む。一斉点灯の街灯も、規則的動きのため、寂寥感を強調する。
ここでは、まったく異なる「窓の灯り」の計画で、集落に**視覚的気配**をつくり出す。
住民が住み、夜、灯りのともる部屋の窓を除く下記の窓が対象となる。

（１）空家、道路に面する窓
（２）居住家屋の、道路に面するが使っていない部屋の窓
（３）家の隙間に面している窓で道路側近くにあり、使っていない部屋の窓

これらの部屋の照明の点灯を、コンピューター制御し、集落全体を一括してコントロールする。
暮れると、リズムを制御しながら、少しずつ「窓の灯り」が点灯を始める。一斉点灯しないのは、すべての窓に居住者がいて、ばらばらに点灯しているように演出するため。
それぞれの窓の灯りの色も、微妙に違えて行く。

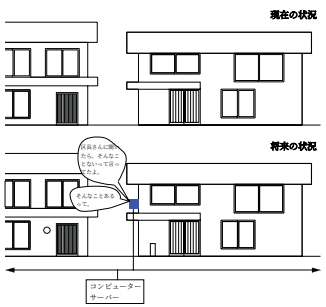
玄関の庇下や家々の外壁には、点々と「行灯」や壁付照明を設置。器具や灯りの色も違え、各家が出しているように見せる。
現在の街灯はなくし、その費用で、「窓の灯り」と「行灯」の電気代を補填する。
その延長として、将来は、電線地中化を図り、電柱を撤去する。

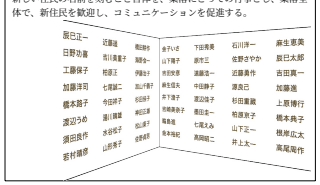
「窓の灯り」と「行灯」は、人の存在を暗示する**視覚的気配**であり、防犯効果もつくり出す。また、コンピューター配線は、ブロードバンドの回線も兼ねる。

声

「人の声」
人が減り、高齢化の始まった集落では「人の声」が、急速に消えて行く。
ここでは、街並の中に、見えないように、小さなスピーカーを配し、そこから、人の会話している声を流し、集落の中に、**聴覚的気配**をつくり出す。それは、実際の「人の声」を誘導する仕掛けでもあり、虚構であっても、集落の寂しさを和らげる。
「人の声」は、予め、住民に、ふつうの会話をしてもらい、その録音を流す場合、それから、子や孫などが里帰りした際に録音した会話を流す場合に分かれる。親は、子や孫の声に力づけられることにもなる。

全スピーカーを一括して、コンピューターで管理し、ときどき、不自然でないように「人の声」を流す。



名

「全住民名表示」
この100年間で、集落で生まれ、育ち、暮らした全住民の名前を、公民館の回りに刻をつくり、生年月日順に、刻み込む。
これだけの住民が暮らしていたという記憶の気配であり、そして、まこれから、新しい住民が増えるたびに、その名前は増えて行く。
新しい住民の名前を刻むこと自体を、集落にとっての行事とし、集落全体で、新住民を歓迎し、コミュニケーションを促進する。